

九九年九月十二日、午前十時二十三分、アメリカ合衆国のケネディ宇宙センターから、ぼくたちを乗せたスペースシャトル、エンデバーが、宇宙へ向かって打ち上げられた。シャトルは、ぐんぐんとすごいスピードで上っていく。そのときのスピードは、秒速約8キロメートル。音の二十五倍のスピードだ。発射四十分後、あっという間に、ぼくたちは地球から三億キロメートルのところまでやってきた。ぼくたちのシャトルは、この高さを保ちなから、地球の周りを時速三万キロメートルで回り続ける。宇宙では、人間がうかぶこともできる。それは宇宙が、一無重力カーといって重さのない空間だからだ。宇宙では、重さだけでなく、上とか下とか右とか左とか、そんなことも関係なくなってしまう。君は、深い海やプールの中にもぐったことがあるだろう。無重力の世界は、そのときの感じと似ている。水にもぐると、体が水の中でふわっとうかぶ。そのとき、まるで体の重さなくなってしまうような気がしなかっただろうか。そして、ときどき、上も下もなくなったような気がしなかっただろうか。無重力はふわふわと、とても気持ちいい。力を入れなくても、いろんなことが簡単にできる。でも、いつもういていると、ちょっとこまるときもある。そんなときのために、ゆかをあちこちにはベルトが付いている。それで体を留めて、うかないようにするのだ。無重力の中にいると、ぼくたちの体にもおかしなことがいろいろある。例えば、地球にいるときより顔がふくらんで、反対に目は細くなってしまふ。どうしてだろう。それは体の下の方にあつた体液が、無重力のために頭の方へうき上がってくるからだ。でも、だいじょうぶ。二分もすればなれてきて、ちゃんとふつうの顔にもどる。シャトルのまどから外をみた。地球だ。台風が雲がみえた。真ん中に丸くあながあいている。あそこが台風が目だ。あの雲の下に、どれだけの人や生き物たちがいるのだろう。宇宙からみる地球のさまじまな風景。いろんな形、いろんな模様。それをみていたぼくは、この地球の風景と、ぼくがけんび鏡でのぞいていた生き物の小さな細ぼうとが、とても似ていることに気がついた。そうなんだ。地球も生きている一つの大きな生き物だったんだ。宇宙からみたとき、そのことがとてもよく分かった。宇宙に行つたのは、ぼくたち人間だけではない。ゴイやカエルやハチ、植物などのいろんな生き物もいっしょに宇宙へ行つた。宇宙では、どんなことが起こるか、なぜそんなことが起こるのか、まだまだ分からないことがたくさんある。これから、もっとたくさんの人や生き物が宇宙へ行くことができるように、いろんなことを調べたり実験したりしなくてはならない。ぼくが宇宙へ行つたのは、その実験をするためだ。